

コンドルと邸宅建築

——生活文化史を視野に入れて——

元千葉工業大学教授 河 東 義 之

はじめに

お招き頂き有り難うございます。私の出身は東京工業大学で、平井聖先生の研究室第二期生です。卒業後は助手を務めさせていただきました。当時、平井研究室の研究テーマは主として近世建築史でしたが、私は設計にも興味があり、少しそれに未練を残しつつ、平井先生に「近代をやりたい」とご相談を申しあげましたところ、お答えは「近代をやるのなら、そのど真ん中をやった方がよろしい」。日本の近代建築史の出発点はジョサイア・コンドル (Josiah Conder 1852-1920) ですから、「じゃあコンドルから」と無謀なことを始めたわけです。

近代建築史を研究される方は誰でもコンドルから入ります。私のコンドル研究は、彼が携わった作品の設計図をテーマにし、各所にある設計図を収集・分析するところから始めました¹。今日はスライドでそのいくつかをご紹介しますが、設計図からいろいろなことが読めてまいります。

コンドルが日本に西洋建築をどのような方法で導入したのか、コンドルは建築家としてどのような姿勢をとっていたのか、そのようなことも、実は設計図から読むことができます。加えて最近、コンドルが最も緊密に接触した岩崎家との往復書簡も発見されてきました²。岩崎家が最初にコンドルに設計を依頼したのは三菱社の二代目総帥で岩崎彌太郎の弟、三菱を近代コンチェルンに育て上げた岩崎彌之助ですが、その彌之助とコンドルとの関係や、コンドルがどういうふうに関係を請けてきたか、コンドルの人柄に触れるような内容も知られるようになりました。

設計図から、そして近年発掘された書簡からわかることも含め、今日は、主にコンドルが最も得意とした邸宅建築について、生活文化史も視野に入れ、お話しします。

概 観

コンドルは建築だけでなく、日本文化の海外への紹介者としても広く知られており、生け花や庭園、あるいは日本画家河鍋暁斎の紹介といった著作も遺しています³。来日の最大目的は、当時イギリスでもブームになっていた日本の文化や美術についての研究であったのではないかと、というようなことも、最近は感じております。

来日の経緯や業績についてはお手許の資料「洋式邸宅の手本を示した ジョサイア・コンドル」⁴に簡単に書きました。

以下、略年譜で概観してみます。

表 ジョサイア・コンドル略年譜および作品

	年 譜	作 品
第 一 期	1852 (嘉永 5) ロンドンで銀行員の長男として生まれる	
	1868 (慶應 4) ベッドフォード商業学校卒業	
	1869 (明治 2) ロジャー・スミスの事務所に入り、サウスケンジントン美術学校およびロンドン大学で建築を学ぶ	
	1873 (明治 6) ウィリアム・バージェスの事務所に助手として入所	
	1875 (明治 8) ワルター・ロンズデルにステンドグラスの制作を学ぶ	
	1876 (明治 9) 王立建築家協会主催の設計競技でソーン賞(最優秀賞)を獲得, 10月, 日本政府と雇用契約を結び, 仏, 伊を経て日本へ出発	
第 二 期	1877 (明治 10) 1月来日, 工部大学校造家学教師, 兼, 工部省宮繕局顧問	工部大学校南門および門衛室
	1878 (明治 11) 王立建築家協会準会員(MRIBA)となる	「日本建築の報告」
	1879 (明治 12) 長女ヘレン(はる)誕生	訓盲院, 「日本の劇場」
	1880 (明治 13) 皇居造営に参画	延遠館家具(設計), 「日本装束史」
	1880 (明治 14) 日本画家河鍋暁斎に弟子入り	開拓使物産売捌所, 上野博物館
	1882 (明治 15) 雇用延長(工部省宮繕局雇, 工部大学校教授兼任)	皇居謁見所(山里正殿)(設計), 宮内省庁舎(設計)
	1883 (明治 16)	鹿鳴館, 伏見宮邸(設計)
	1884 (明治 17) 工部省解雇, 太政官雇, 勲四等旭日小綬章, 王立建築家協会正会員(FRIBA)	有栖川宮邸, 北白川宮邸, 東京大学法文科校舎
	1885 (明治 18) 京橋区西紺屋町官舎に移転	中央諸官庁配置計画(設計)
	1886 (明治 19) 臨時建築局雇, 帝国大学工科大学講師, 造家学会名誉会長, ドイツ出張, ロンドンに帰省	内務大臣官邸, 陸軍大臣官邸, 『造家必携』
1887 (明治 20) ロンドンより帰還	外務次官官邸, 外務秘書官官邸, 「日本の住宅建築」	
第 三 期	1888 (明治 21) 帝国大学講師辞任, 西紺屋町官舎に設計事務所を開設	
	1889 (明治 22)	カークウッド邸, 内閣庁舎, 岩崎家深川別邸
	1890 (明治 23) 臨時建築局廃局(退官), 内務省名誉顧問, 三菱社顧問	横浜築港事務所
	1891 (明治 24) 濃尾地震罹災地を視察	ニコライ堂, 『日本の花と花道』
	1892 (明治 25) 帝国大学名誉教授	岩崎家駿河台邸(設計), 海軍大臣官邸, 「各種建築に関し近來の地震の結果」, 『日本の山水庭園』
	1893 (明治 26) 前波くめと結婚	築地トリニティ教会内装, 荘田平五郎邸
	1894 (明治 27) 勲三等瑞宝章	唯一館, 基督教徒青年会館, 海軍省庁舎, 三菱一号館
	1895 (明治 28)	三菱二号館, ニコライ堂図書館
	1896 (明治 29) 東京演劇音楽協会に参加	スクリパ邸, イタリア公使館, 岩崎家茅町邸, 東京倶楽部
	1897 (明治 30)	ドイツ公使館, 長崎ホテル
	1898 (明治 31)	ウォルシュ商会, ロイヤルホテル, 華族会館改修
	1899 (明治 32)	オーストリア・ハンガリー公使館, 立教女学校校舎
	1900 (明治 33)	高田慎蔵本郷邸, 横浜山手教会, 横浜山手85番病院
	1901 (明治 34) ロンドンに帰省(はる留学)	横浜ユナイテッド倶楽部, サミュエル商会, ストローム商会, 高田慎蔵青山邸
第 四 期	1904 (明治 37) 麻布三河台に自邸完成, 転居(事務所も)	コンドル自邸
	1905 (明治 38)	松方家仙台坂別邸, 松方家三田邸
	1906 (明治 39) 長女はる, ウィリアム・レナート・グルットと結婚	益田孝邸, 渡辺邸, 鎌倉海浜院ホテル
	1907 (明治 40)	赤星家大磯別邸, 末延道成邸
	1908 (明治 41)	岩崎家高輪別邸
	1909 (明治 42)	寺島宗則邸, 岩崎家箱根湯本別邸, 小笠原教会, 近藤廉平邸
	1910 (明治 43)	岩崎家玉川廟
	1911 (明治 44)	アーウィン邸, 加藤高明邸, 『河鍋暁斎の絵と習作』
	1912 (明治 45)	岩永裕吉邸, 園田孝吉邸, 赤星家赤坂邸, 東京倶楽部
	1913 (大正 2)	諸戸清六邸, 今村繁三邸, 三井家倶楽部, 岩崎家元箱根別邸
	1914 (大正 3) 工学博士号を授与	
	1915 (大正 4)	島津忠重邸, 岩崎家茅町邸(改築案設計)
	1917 (大正 6)	古河虎之助邸, 川崎邸(設計), 北下浦別邸(設計)
	1918 (大正 7)	山縣有朋小田原別邸
	1919 (大正 8)	成瀬正行邸
1920 (大正 9) 建築学会から表彰, 夫人くめ逝去 コンドル逝去(6.21), 享年67, 聖アンデレ教会で告別式, 護国寺墓地に埋葬	串田萬蔵邸, 木村敬義邸	

注) ゴシック体は現存するもの, 『』は単行本, 「」は論文。

年譜は生涯を四期に分けています。第一期（1852-1876）は来日の前までです。イギリスで育ったコンドルは、ロンドン大学とサウスケンジントン美術学校で建築と美術を学んでいますが、正式に卒業してはいません。この他、当時イギリスでも著名なロジャー・スミス（Tomas Roger Smith 1830-1903）、さらにはウィリアム・バージェス（William Burges 1827-1881）の設計事務所で実務を担当し、さらに明治9（1876）年、英国王立建築家協会（RIBA）の新人登竜門と言われた設計競技で最優秀賞であるソーン賞（Soane Prize）を獲得したのがコンドルのイギリスでの経歴であり、そこに目を付けたのが明治政府でした。同年10月に明治政府と雇用契約を結び、明治10年1月に来日しました。

招聘の目的、つまり明治政府がコンドルに期待したことは、一つは西洋建築を設計できる日本人建築家を速急に養成してほしいということでした。もう一つは、それまでは系統的な教育を受けていないお雇い外国人建築家⁵に頼っていた公共建築、西洋建築を、より正統的なものとして実現してほしい。つまり教育と実務、教師と建築家を兼務することでした。これに応じたコンドルは、建築家として次々に主要な建築に携わり、教育においても、彼が設計を依頼された作品の製図やあるいは現場監督などの仕事に学生を積極的に参加させ、なんとか早く日本人建築家を養成しようという態度をみせています。

第二期（1877-1887）は彼がお雇い外国人として国の方針に従って活躍した時期、つまり官界での活躍時期ですが、第三期（1888-1901）になると官界を退きます。普通のお雇い外国人ならここで帰国してしましますが、どうやら彼の最大の目的は日本文化の研究、吸収にあったようで、この時期はそれが一番面白くなってきた頃だったのではないかと推察されます。民間に設計事務所を開き、民間の建築家として活躍を始めます。その際に大きな後ろ盾となったのが、第二期に知り合った岩崎彌之助と三菱でした。

第四期（1904-1920）は三河台に自宅を新たに建設し、一階の事務所に数人の日本人建築家が通いながらこつこつと、ほとんどが邸宅建築でしたが、作り続けた時期です。この頃すでに日本の建築界は日本人建築家の時代になっていました。以前ある文章⁶に書きましたが、晩年にはどうやら日本の建築界は一時期コンドル先生を忘れかけていたようで、弟子達が次々と実績をあげ博士号を取得する中で、コンドル先生は最後になってしまった、といった状態にありました。コンドル先生に学位が贈られたのは大正3（1914）年でした。現在、コンドルの作品で遺されているものは、この第四期のものが中心です。

年譜の作品欄で、ゴシック体の9件が現存する建物です。一番古いのは、いずれも改造されていますが、神田駿河台のニコライ堂（明治24年）とニコライ堂図書館（明治28年）、二番目が邸宅建築の初期の代表作と言われる岩崎久彌邸（岩崎家茅町邸 明治29年）です。以降、これを含めた邸宅建築をご紹介します。コンドルによってどのように洋館（洋風の邸宅は当時、洋館と呼ばれた）と洋風の生活が上流階級の間で導入され、普及していったかをお話しします。

コンドルの邸宅建築

施主の意向を反映した設計

コンドルは初期（年譜 第二期）においては、非常によく政府の要求に応えたと思います。いろんな様式の建築を作るのですが、どうもそれは立地条件、建物の性格、目的、予算、政府の希望に添って様々な様式の出し入れをした、というふう考えた方がわかりやすい。それから第三期以降、民間にあって邸宅建築を手がけるようになった時期は、これまた非常によく施主の希望を聞いています。最

初の設計に対して、施主の要求をここまで聞くのかと思うような設計変更を平気で行っていきます。つまりコンドルは、自分の様式、あるいは自分の主張を一本で押し通すことのほとんどなかった建築家であると言えます。このことは、コンドルの邸宅建築によって我が国の上流階級の邸宅における洋館導入の変遷をみる際に、コンドルの作品だからということをおそらくあまり考慮しなくても、当時の日本の上流階級が何を、どういう洋館を望んでいたか、洋風の邸宅をどのように導入したかということをおそらくストレートにみることを可能にしていると言えるのではないのでしょうか。ある意味で言うと、非常に癖の少ない建築家で、見方を変えると、日本の文化を研究する方が第一義で、片手間に設計をやったのではないかとさえ思えてくるようなところもあります。むしろ我が国の建築界における彼の一番の功績は技術的な面にあったのではないかと考えられ、このことは現在、三菱一号館の展示会のパンフレットに文章⁷を書いていますので、そちらをお読みいただければと思います。

皇族の邸宅の嚆矢

コンドルは明治10年に来日、大正9年に亡くなります。それまでに手がけた作品は年譜に記載したもの以外にもまだある可能性はありますが、大体100ほどです。おそらく一番よく知られているのは鹿鳴館（明治16年）でしょう。しかし鹿鳴館はコンドルの作品の中では質の良い作品だとは言えません。おそらく本人もそう思っていたのではないかと思います。邸宅建築は約50あり、全作品のちょうど5割ほどになります。初期にいくつか重要な邸宅建築の業績がありますが、ほとんどが晩年の作品となります。

初期の作品で重要なのは、政府の要望で明治天皇に次ぐ皇族であった有栖川宮、それから北白川宮、伏見宮の三人の皇族の邸宅です。また同じ時期にコンドルは皇居造営にも関わり、皇居の一番重要な正殿となる謁見所の設計も行っています。広い意味では天皇の住まい、邸宅と言えるかもしれません。これは設計から着工までこぎつけたのですが、政府内の関係で中止になり、明治21年に木子清敬による木造の明治宮殿が完成することになります。

この時期はお雇い外国人として当時官公庁を一手に引き受けていた工部省営繕局の顧問を務めていましたが、宮内省内匠寮の皇居御造営事務局にも出仕し皇居の正殿、さらに三人の皇族の邸宅を設計しています。ただこのうち伏見宮邸だけは宮家の都合で実施されずに延期となり、後に彼の最初の教え子の一人片山東熊が設計をすることになります。有栖川宮邸と北白川宮邸はコンドルの死後刊行された作品集⁸においても、これが我が国における皇族の邸宅の始まりであり、基本となったと書かれています。これらの皇族の邸宅は、それ以外の政府高官や上流階級の邸宅とは、生活様式という点で異なる点があります。

高官官邸の嚆矢

その次にコンドルが政府のお雇い外国人時代に設計したのが、高官達の官邸でした。その後高官官邸が普及しますが、おそらくその官邸のモデルを作ったのもコンドルだったと考えています。コンドルが邸宅建築としてお雇い外国人時代に果たした二つの大きな役割、業績は、一つは皇族の邸宅のモデルを作ったこと、もう一つは高官の官邸のモデルを作ったことです。まさにこの二つから日本に洋館、洋風住宅が普及していきますので、そういう意味では我が国の洋風邸宅の最初の出発点も、やはりコンドルにあるということになります。

上流階級の邸宅

コンドルは独立して民間で設計事務所を開いた後、幅広く上流階級の邸宅を手がけることになりましたが、そのきっかけを作ったのが岩崎彌之助の深川別邸（明治22年）でした。以後彌之助に限らず、彌之助の甥で三菱社三代目社長になる久彌、彌之助の息子で四代目社長になる小彌太を含めて、コンドルが生きている間に岩崎家が作った洋館のほとんどはコンドルが設計しています。それだけではなく、岩崎家と関係の深い上流階級の邸宅も、そういう意味では裾野が広がり、総理大臣を務めたこともある松方正義の邸宅、この建設費を含む全額を岩崎家が出し、コンドルが設計しています。これは松方正義の次男正作と岩崎彌之助の長女の結婚の祝儀として洋館2棟を進呈したものです。今では考えられないようなことですが、加藤高明邸も同じような事情がありました。三菱関係の邸宅が施主としては目を引きますが、後半には島津家、三井家、古河家といった富豪達の邸宅も手がけるようになります。

規模ですが、それだけの上流階級の邸宅でも、豪壮な邸宅ばかりとも言えず、非常にこぢんまりとした別邸、別荘、あるいは増築も手がけ、それらもまた自ら設計図を描いています。一般公開して重要文化財になっている岩崎久彌の本邸（茅町邸）、島津邸、古河邸、そういった邸宅はかなり大規模な邸宅で、最大規模は初期の有栖川宮邸が床面積459坪、最小は山縣有朋が晩年を過ごした小田原板橋の別邸古希庵の洋館です。これは二部屋だけの増築でわずか33坪です。わずかといっても33坪あれば、現在では立派な一家四人の住宅として住めますが、当時の上流階級としては、ほんの小さな離れの洋館でした。

皇族の邸宅 一洋館で洋風生活のすべてを完結する

初期のものからご覧いただきます。まずは皇族の邸宅のモデルとなった建物、図1は明治16年にコンドルが設計した伏見宮邸の設計図で、公式に政府に提出した自筆の図面のような様子です。敷地全体が描かれており、他の二邸（有栖川宮邸・北白川宮邸）は当初の平面図や配置図が遺っていませんので大変貴重です。伏見宮邸としての敷地は広いものではありませんが、その後の高官や富豪達の大邸宅と違う点は、伏見宮が煉瓦造二階建の洋館の中で生活のすべてを完結している点です。和風の部分は家従や侍女達のサービス施設です。明治の大邸宅は一般に、和館と洋館を両方併せ持つ和洋館並列住宅と言われていたのですが、その場合、洋館は接待、迎賓のためにたまにしか使わない、つまり上流階級のステータスとしての迎賓館でした。和館は日常の住まい、生活の場としての建物で、江戸時代の大名や旗本の屋敷をモデルにした大邸宅でした。この二つを持つのが明治の大邸宅の特徴だと言われていたのですが、実は皇族の邸宅には本人のための和館がありません。洋館のみで生活を完了する。これはつまり、生活も洋風であるということ、ベッドに

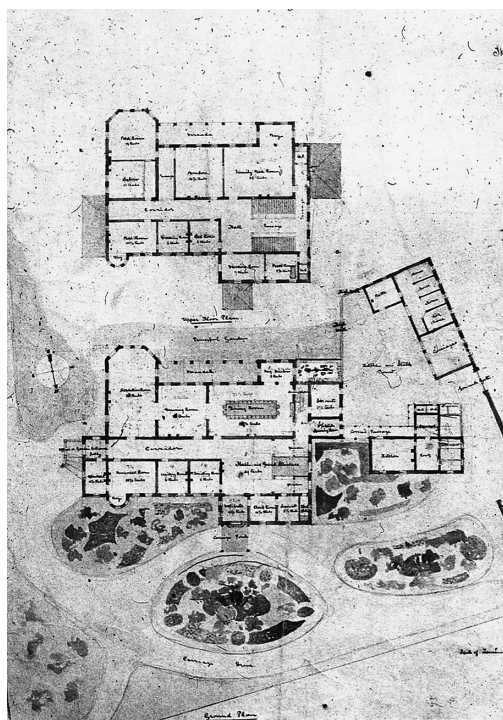


図1 伏見宮邸設計図（明治16年）
（個人蔵）

テーブルに椅子で生活を行うという事です。基本的には一階に公的な客を招く大食堂や客室があり、二階にベッドルームや家族の居間があります。これが明治初期の皇族の邸宅の特徴で、コンドルの作品でも多くは一階がパブリックで二階がプライベートとなっています。従って洋館をまず導入したのは明治初期の皇族であり、椅子式の洋風の生活様式を近代日本で採用し実践したのも間違いなく天皇をはじめ皇族が最初であったということになります。

明治17年に、実際に有栖川宮邸(図2)と北白川宮邸(図3)が国家的事業として建設されます。当時有栖川宮邸は、総工費46万円で、鹿鳴館の約3倍の費用をかけており、明治前期に建設された洋館の中では、最も高額な建築と言っていると思います。今では、12,000倍とも15,000倍とも言いますので、10,000倍でも46億ですね。明治宮殿が和風で終わってしまいましたので、それに代わる洋式宮殿としては、これが最高の宮殿であったということになります。当初の平面図は残っていませんが、やはり伏見宮邸と同じように基本的には全て洋間です。有栖川宮邸は若宮すなわち息子夫婦の洋館と有栖川宮夫婦の洋館からなっておりますので、二軒分と考えれば総工費もわかる気がします。付属屋は御供の人達の部屋で、そこには和室はありますが、有栖川宮が生活される部分はすべて洋間、西洋風の生活を逸早く導入しております。

大食堂はおそらくある意味では迎賓館を兼ねていただろうと考えられます。鹿鳴館ができるまでは、初期の政府の迎賓は浜離宮内にあった延遠館で行われましたが、あれではというので、政府は外国の貴賓達を招くための迎賓館づくりをずいぶん重要視しています。初期には有栖川宮邸がその役割を果たしたと考えられますが、もう一つ、明治において重要な迎賓館は後に述べる外務卿の官邸でした。

北白川宮邸は、噴水や内部の調度類の図面しか残されていません。宮内庁の資料によって平面がわかりますが、やはり北白川宮の生活の場は二階建の洋館だけです。ただ有栖川宮邸と違う点は洋館二階に和室が設けられていることです。また、別棟の和館には姫宮のためのお座敷がつくられておりますので、姫宮は和館の日本間で生活をされていたようです。あとは侍女や家従の方達の部屋です。北白川宮ご夫妻はあくまでこの洋館だけで生活の100%をこなされたということになりますが、日常の



図2 有栖川宮邸(明治17年)(『コンドル博士遺作集』より)

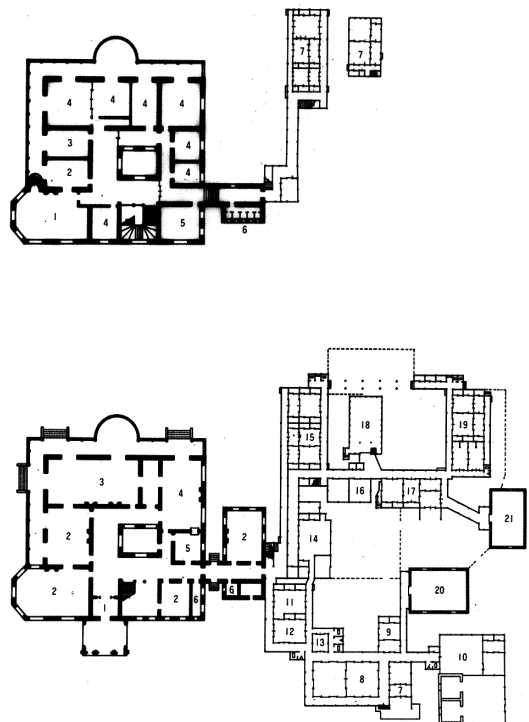


図3 北白川宮邸平面図(明治17年)
(小野木重勝『明治洋風宮廷建築』より)

生活は和洋折衷であったとも考えられます。これら皇族の邸宅は3棟とも同じようなスタイルですが、これが後々まで皇族の邸宅の基本になっていきます。

高官官邸 一主として和洋館並列住宅

官庁集中計画にともなって、コンドルが果たした役割の一つが高官官邸の設計です。官庁集中計画は国会議事堂をはじめ、諸官庁を一ヶ所に建設するという国家的大事業だったのです。当初はコンドルも全体の配置計画を行い、国会議事堂の設計も行っておりますが⁹、条約改正の問題もあって、政府の中のドイツ派が台頭します。ドイツからエンデ (Hermann Ende 1829-1907)、ベックマン (Wilhelm Böckmann 1832-1902) を招いて計画を依頼したことから、イギリス人コンドルはどちらかという疎遠になっていきます。

コンドルに与えられた仕事は、官庁としては海軍省ですが、それ以外に多くの高官の官邸を設計、建設しています。外務次官官邸、内務大臣官邸、陸軍大臣官邸、外務秘書官官邸、そして海軍大臣官邸を手がけました。ところで、コンドルの設計ではありませんが、大臣官邸で最初に建設されたのは外務卿 (後の外務大臣) 官邸でして、すでに計画は明治8年に始まっていた¹⁰。当時はまだ太政官制ですから、政府のトップは太政大臣でしたが、太政大臣官邸をさしおいて外務卿官邸が最初に建設されたのは、これが外国貴賓のための迎賓館として位置付けられていたからです。外務卿官邸の建設計画はコンドルが来日した時には既に開始されていたので、設計はコンドルには委ねられていませんが、外務次官官邸 (裏霞ヶ関官邸) (図4) はコンドルが設計しました。二階建の洋館で、洋館の左側に渡り廊下を経て和館がありました。特に外務省の高官官邸に関しては、外務卿だけでなく、外務次官、外務秘書官も立派な洋館を持ち、最初の外務卿官邸以外はその隣に和館を持っていました。

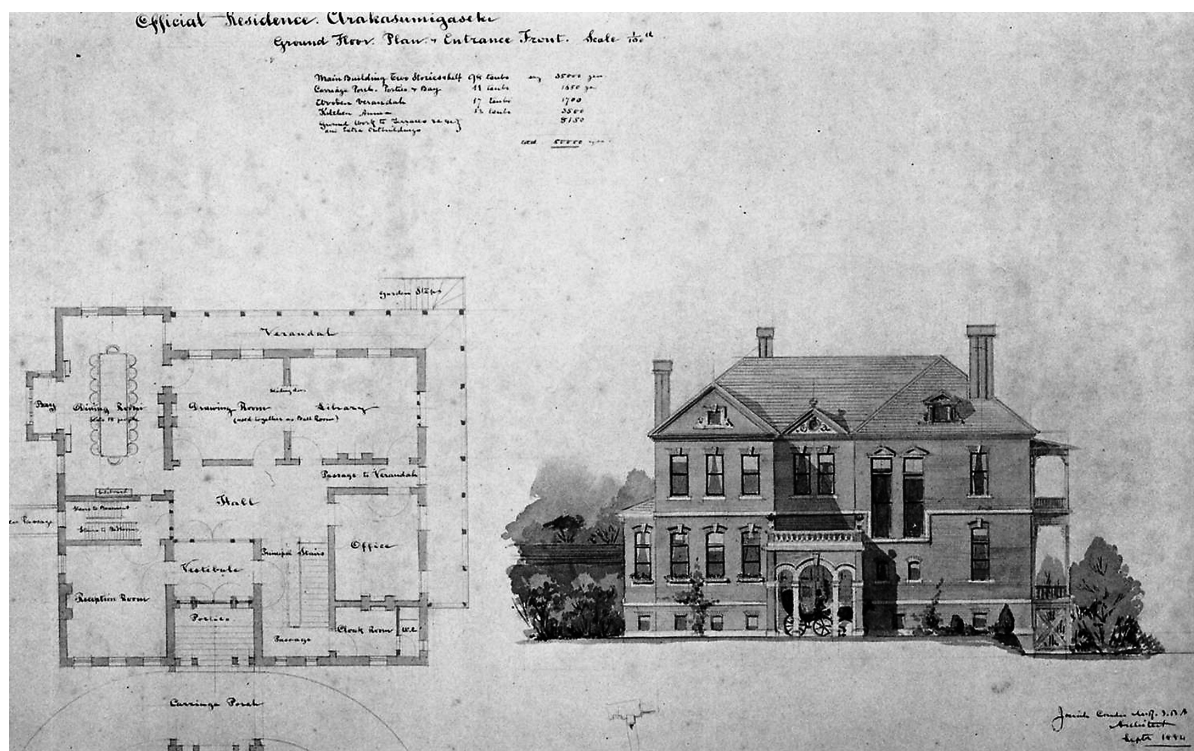


図4 外務次官官邸設計図 (明治17年) (京都大学蔵)

この深川別邸にも洋館以外に広大な和館がありました。この初期の洋館で面白いのは、洋館部分にも厨房があり洋館の中だけで生活が完結するようになっていることです。和館とは廊下で繋がっていません。彌之助はここで会社の園遊会を盛大に開いたようで、社員達の保養施設、あるいは岩崎家の迎賓館として設計したのであり、別邸として自分が住むことはあまり考えていなかったのではないかと思います。和館の方にも招いた客を泊めることを彼自身も考えていたようです。

その彌之助の本邸は神田駿河台にありました。現在のニコライ堂と聖橋の間あたりの土地がすべて彌之助の駿河台邸(図7)でした。震災後に聖橋をつくる時に、ニコライ堂の前の道路を広げるため岩崎家の土地をカットすることを示した図面も残っております。その広大な土地に、明治25年、洋館の設計を彌之助がコンドルに依頼しておりますが、これは実現しませんでした。三菱の総帥の本邸にしては、柱や梁は木造で間に煉瓦を積んだ木骨煉瓦造です。神戸や横浜の異人館にもありそうな、いわゆるコロニアル様式という軽快な建物で、規模も小さく、決して重厚さや風格を感じる邸宅ではありません。どうやら彌之助という人物は、本邸についてはこういった考えを持っていたようです。彌之助の別邸は豪壮なものがいくつかあり、現存する高輪別邸(明治41年)もコンドルの作品では一番重厚な邸宅建築であることから考えても、この本邸は彌之助側の意向の反映とみてよさそうです。このコンドルの駿河台邸の洋館が実現しなかったのは、

「あまりに、岩崎彌之助の本邸としては」、ということが社員等からあって実現しなかったのではないのでしょうか。その後もう少し規模の大きいものが実現していますが、やはり木造の建築です(設計者は不明)。

三菱総帥の三代目を継いだのが本家岩崎彌太郎の長男、久彌です。彌之助は分家になります。その久彌の本邸が現在の湯島の広大な土地に現存し公開されている茅町邸(図10-図12)です。久彌はア

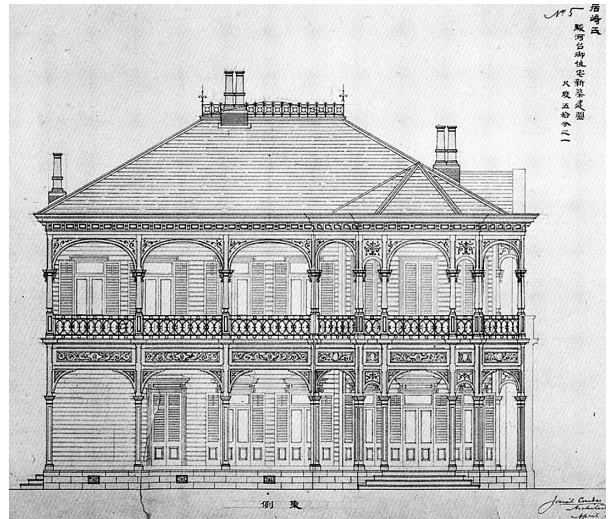


図7 岩崎家駿河台邸洋館設計図(明治25年)
(三菱地所蔵)

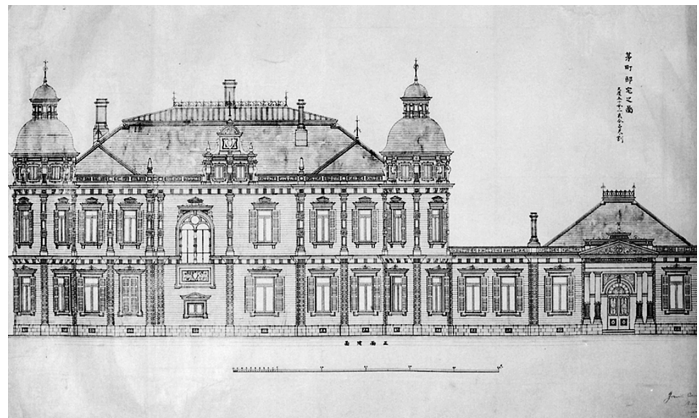


図8 岩崎家茅町邸洋館設計図(北側立面)(三菱地所蔵)

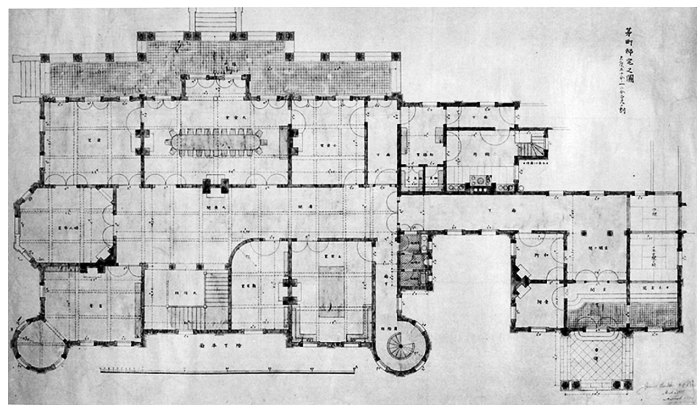


図9 岩崎家茅町邸洋館設計図(1階平面)(三菱地所蔵)

メリカ留学から帰国後すぐに若くして三菱の社長になり、この本邸を建設しました。当然後ろ盾は彌之助ですから、彌之助の紹介でコンドルに設計を依頼したのだろうと思います。最初にコンドルが久彌に提出した計画案(図8, 図9)は木造でした。三菱の総帥であり岩崎家本家の本邸でありながら、なぜ木造か、という疑問が残るところですが、先ほどの彌之助の「別邸を豪華に、本邸は粗末でいい」というような考えを受け継いだのかもしれませんが。その木造に合わせ



図10 岩崎家茅町邸洋館(明治29年)

てコンドルが設計したどこか丸みを帯びた全体に優しい印象の案は久彌の意には添わなかったようでして、設計変更を求めています。その設計変更の依頼により、コンドルが完成したのが現在の岩崎邸です。

計画案の平面図には面白いところがあり、洋館と和館の入口を一ヶ所を集める玄関を提案しています。すなわち玄関から入って正面にまっすぐ行くと洋館に通じ、別の方向へ行くと式台があり日本間があって、渡り廊下を通ると広大な和館に通じています。こういう事例はその後もあまりみかけませんが、残念ながら実現しませんでした。

現存する洋館はほぼ明治29年頃に建設されています。隣接して広大な和館があったのですが、現在和館は一部しか残されていません。残されている部分は生活の場というよりは、和館の中での接客部分です。従来洋館は迎賓館として、和館は生活の場として、と言われてきましたが、実は和館の中にも当然接客スペースと生活のためのスペースの両方がありました。

明治43年頃に増築した部分があります¹²。工事中に地下でガス爆発が起き、もう一回造り直した部分があることも近年わかってまいりました¹³。右側に玉突室があります。洋館内部で注目されるのは、一階の婦人客室にイスラム風の意匠が用いられていること、また日本の火灯窓をあしらったような意匠もみられ、このあたりはコンドルの日本文化の研究、あるいは西洋と日本との間のイスラム様式を比較的早くから日本に提案していたことの現れであると言われてしています。

玉突室も重要文化財になっています。明治30年頃の設計図も残っていますし、明治31, 2年頃につくられた可能性が強いと思います。図12は岩崎家が使っていた



図11 岩崎家茅町邸洋館1階ホール(明治29年)

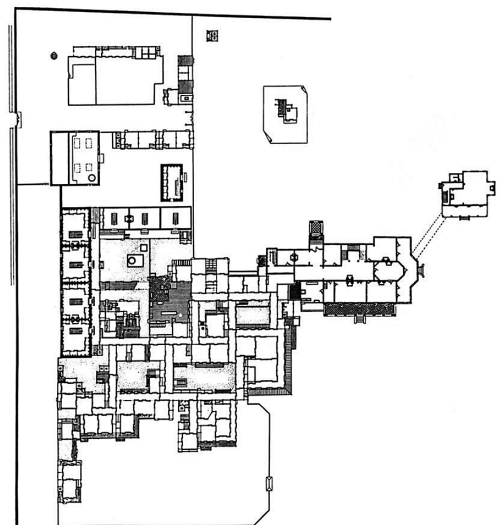


図12 岩崎家茅町邸配置図
(保岡勝也『最新住宅建築』をもとに作成)

頃の図面で、洋館、和館、玉突き室の位置や規模、和館における家族の部屋や主人の居間やスペースがわかります。現在遺っている和館が表向きの接客スペースということになります。これが典型的な富豪達の和洋館並列住宅です。

岩崎久彌は晩年、洋館の書斎で仕事をされていたようです。くつろぐ時や日常のお客もここに招いたのでしょうか。実際に仕事や読書は書斎で行ったり、時々大食堂で家族が集まって食事をしたようで、後に洋館に厨房が造られています。これは洋風生活を取り入れようという努力であったのだらうと思いますが、明治の半ばから末期になると上流階級の間にも、少しずつですが洋風生活そのものも取り入れようとする変化はみられるようです。

コンドル自邸

こうした変化をどう位置付けるかは難しいですが、コンドル自身の邸宅(図13, 図14)もやはり洋館と和館でできています。洋館の一階は煉瓦造で二階が木造です。一階は事務所を兼ねた接客兼コンドル事務所、ここに何人かの所員達が毎日通ってこつこつと図面を描いていました。二階がコンドルの居住スペース。廊下で繋がれて、やはり二階建の和館がありました。この和館は主として奥さんの前波くめさんのスペースです。かつてコンドル家と親しくつき合っておられた方の回想録¹⁴によると、「コンドル先生は、日常は流暢な日本語で奥様と会話をされていた。けれど他の方には英語で話しかけられた」とも書かれています。どこまでそうであったかはわかりませんが、和館はもしかしたら、コンドルが設計した唯一のものかもしれません。私はコンドルが自分で設計したのではないかと思います。というのは、この頃になると、日本の伝統的な建築について深い知識を持っていたのは、建築界でもコンドルが一番であったのではないかと、いう気もするからです。しかし彼は、他の多くの富豪や高官達の和館には一切手をつけておらず、コンドルが木造の和館を設計した形跡は全くありません。自邸以外は見当たらないということになります。

松方正義の洋館

明治38年頃からコンドルの作品の中に和室が導入されるようになります。高官や富豪達も洋風の生活様式を受け入れようと努力する一方で、自邸の洋館の中に和風の畳敷きの部屋を導入するようになります。松方正義の仙台坂別邸(図15)には主要な和室が二部屋あります。ただ後の日本間、和室



図13 コンドル自邸(明治37年)
(『コンドル博士遺作集』より)

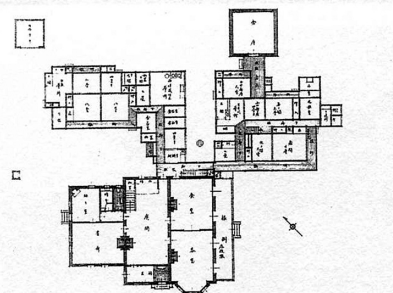
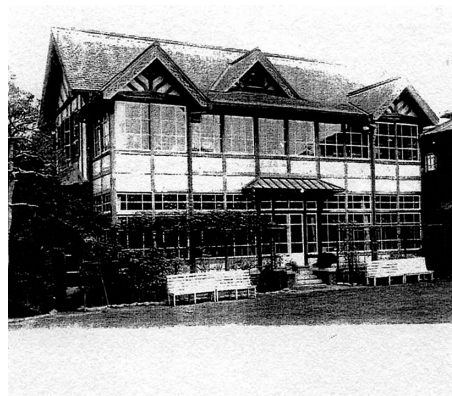


図14 コンドル自邸平面図(明治37年)
(『コンドル博士遺作集』より)

と違う点は、畳敷きですが壁も天井も洋風で、床に絨毯のかわりに畳を敷いただけの和室です。それでも初期の北白川宮邸を例外とすれば、これが民間の上流階級の洋館の中に畳敷きの部屋が持ち込まれた最初の事例ということになります。さらにこの別邸には和館が付属していますが、コンドルが設計したのは洋館だけで、その洋館の建設費は全額を岩崎家が出しております。

岩崎家とコンドルとの関わりは特別だったようです。建設の請負、仕事の受け方は、少なくとも岩崎家に関しては、建設費全額がコンドルの口座に払い込まれています。建設会社というよりは、コンドルが職人を集め、その費用はコンドルが支払う、設計料もその中に含まれています。つまり、建設に関わる費用はコンドルにすべて任せるという方式でした。この松方家や加藤高明邸（明治44年）の場合も同様でした。岩崎家としては相当コンドルを信用し、設計から工事完了までのすべてをコンドルに一任していたようです。

別邸 一軽快さと住みやすさ

明治40年頃から、三菱や三井の重役クラスの人達の邸宅や別邸を数多く手がけることとなります。数の上では、最上流階級というよりはもう少し下のクラスで住みやすい洋館といったタイプのものがコンドルの作品に多いのですが、それらは今日ほとんど残っていません。代表的な例が赤星家の大磯別邸（明治40年）（図16）です。赤星家は海軍との関わりで財を成した富豪のようです。コンドルが描いた最初のスケッチ、計画案は、実際には少しデザインが変わって実施されました。一階は煉瓦造で石を張っていますが、二階は木造で、木の柱や梁を意匠

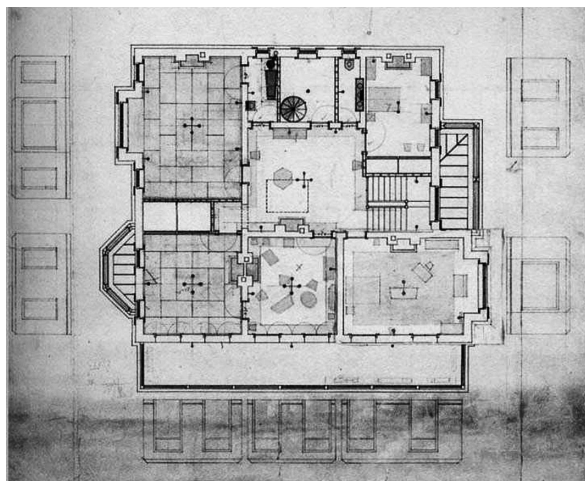


図15 松方家仙台坂別邸（明治38年）（三菱地所蔵）

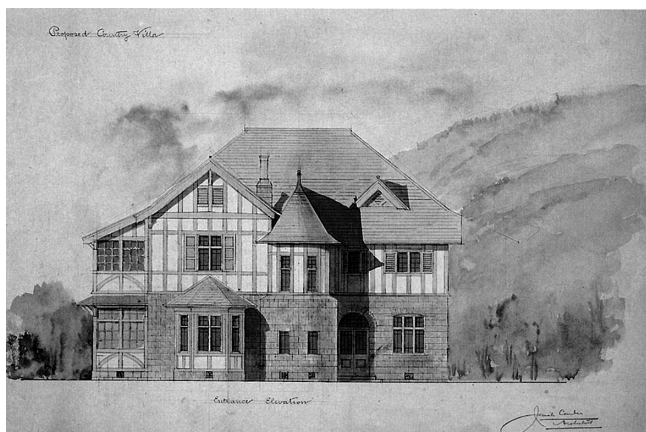


図16 赤星家大磯別邸（明治40年）（京都大学蔵）

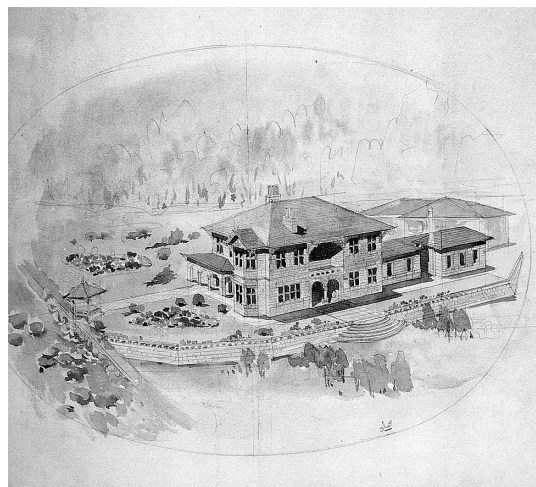


図17 岩崎家箱根湯本別邸（明治42年）
（三菱地所蔵）



図18 赤星家赤坂邸（明治45年）（京都大学蔵）

的に見せるハーフティンバー形式(木骨形式)を採用しています。ハーフティンバーはイギリスでもゴシックの流れとして流行しますが、ちょうど明治30年代の終わり頃からコンドルの作品の中でも目立つようになり¹⁵ます。

岩崎家箱根湯本の別邸(図17)は岩崎小彌太が施主で、やはり和館がありました。箱根湯本駅の少し先の早川を渡った左手奥の、一万坪を超える広大な跡地は、現在は吉池旅館という旅館になっています。コンドル設計の洋館は震災の被害に遭い壊されています。規模が小さいとは言え、我々の住まいからすると随分大きいものです。

赤星家の赤坂邸(図18)などの庭園や洋館を見ますと、一階は煉瓦ですが、二階は木造のハーフティンバーで、少し軽快な、住みやすい、一般に洋館が普及し始めたことを感じさせるようなデザインです。この手法が明治40年代から大正初期にかけてのコンドルの作品の一つの大きな特徴になっています。豪壮な洋館がもう少し下の階級まで降りてきたとも言えそうです。

その一つですが、図19はハーフティンバーではありませんが、桑名の諸戸清六邸の洋館です。周りの和館はお抱えの大工・棟梁が設計建築にあたり、コンドルは全くタッチしていません。六華苑として桑名市が所有、公開しています。コンドルの邸宅作品は、東京・神奈川にほとんど集中していますが、それ以外の地域で残されているものとしては、この洋館が唯一ということになります。諸戸清六は日本



図19 諸戸邸(大正2年)
 (『旧諸戸清六邸(六華苑)整備工事報告書』より)

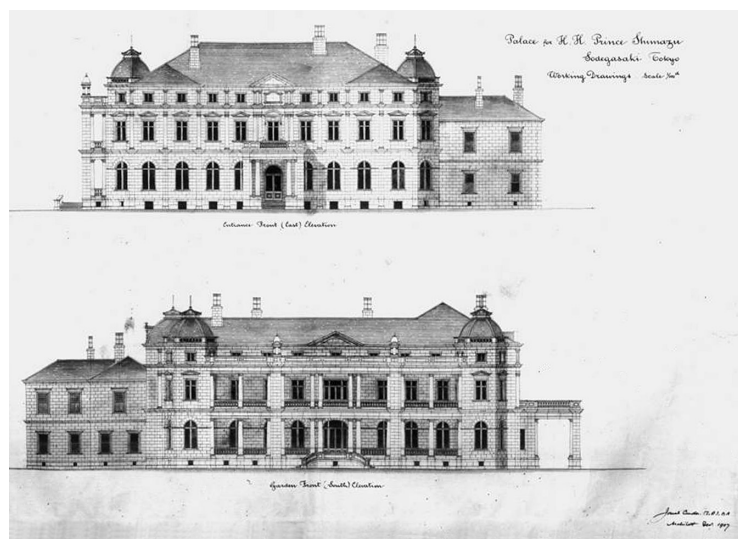


図20 島津邸計画案(京都大学蔵)

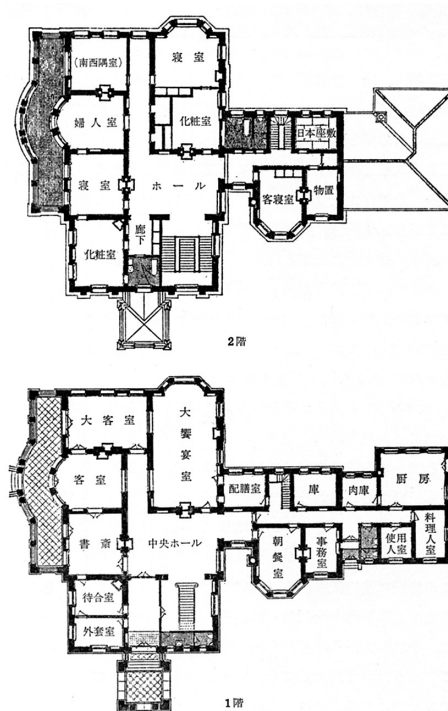


図21 島津邸平面図(大正4年)
 (『建築雑誌』402号より)

一の山林王と言われた人物で、諸戸家は戦後の農地解放に遭わなかったこともあり、現在でも日光をはじめ全国にかなりの山林を所有しています。

洋館生活の普及

大正時代になりますと、上流階級の間には洋風の生活がかなり普及します。人によりますが、外国赴任が長かったり、若い頃に留学をしたような人が洋風の生活スタイルを選ぶようになり、上流階級の中にも和館・洋館両方併せ持つスタイルから洋館だけで生活する事例が増えてきます。コンドルの作品で言いますと、島津忠重邸（大正4年）がそうでして、当初から和館は計画されませんでした。この建物は最初に、何しろ薩摩の島津家ですから、コンドルの邸宅建築としてはナンバーワンに匹敵すると言われる豪壮な計画案（図20）を設計していますが、島津家から規模を縮小して予算を減らすようにとの要望があったと思われ、建設された現在の建物（図21）は、当初の約半分の規模でした。作品集¹⁶の、コンドルのお弟子さんの解説によると、「初めの案が実現していればコンドル先生の邸宅建築の代表作になっただろう。しかし残念ながら規模を縮小されたので、先生もすこし気に入らないところもあったのではないか」といったような推測がなされています。現在は清泉女子大学として、いまだにこの内部は教室としても使われております。

室内装飾はこの場合、コンドルは全く手がけておらず、家具・調度・カーテン類はすべて薩摩出身の西洋画家、黒田清輝が担当しています。黒田清輝の日記¹⁷を見たところでは、黒田とコンドルとの接触の記事が一ヶ所もないものですから、最初から室内調度類、装飾・家具類は黒田清輝に任せ、コンドルは建物のみを担当したと考えられます。室内装飾としてはせいぜい絨毯ぐらいだったのでしょうか。

洋館には厨房、使用人室が付き、一階には大食堂、来客室等がありますが、二階は婦人室、化粧室、寝室があり、洋館で生活を完結できるようになっています。大正時代になってようやく、日本の上流階級が明治初期の皇族のレベルに近づいてきたと言えそうです。

洋館の中の和室

実は大正4年、現存する重要文化財の岩崎家茅町邸（明治29年）を改築して鉄筋コンクリート三階建の大邸宅をつくらうという計画がありました。図22が近年発見された図面でコンドルが設計しています。ちょっと面白いのは、屋根の扱いがどことなく和風です。帝冠様式¹⁸とまでは言いませんが、鉄筋コンクリートでしかもちょっと珍しく古典的なモチーフが用いられた建物の上に、屋根がふわりと乗ったような設計は大変面白い。三階部分が、浮いているように見えるのは、周囲がテラスになっているためです。奥に木造の和室が並び、和室の前がベランダです。これができたら、現在残されている岩崎邸がなくなっていたわ

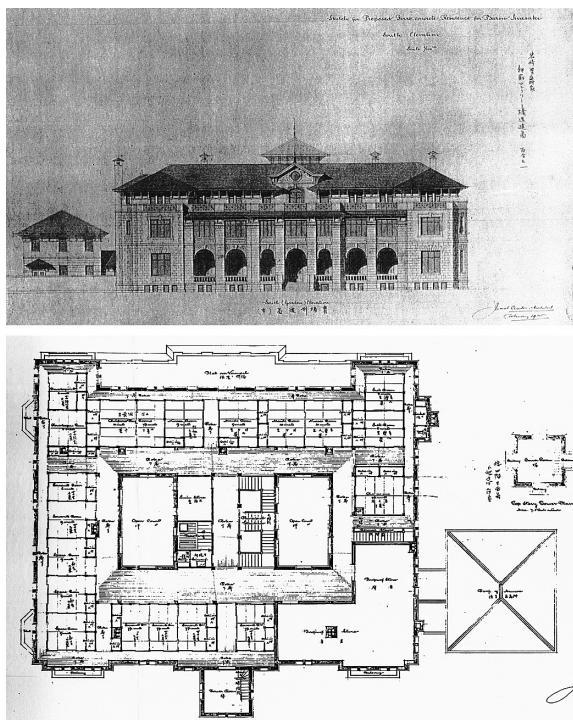


図22 岩崎家茅町邸改築案設計図（大正4年）
（静嘉堂文庫蔵）



図23 古河邸（大正6年）

けですから痛し痒しですが、コンドルの作品の中では非常に珍しい大建築ということになります。三階のワンフロアをほとんど和室にした、以前は知られていなかった作品です。

この頃から、本格的な和室が洋館の中に取り込まれる例が増えてきます。洋館だけで生活をするかわりに、和と洋の両方の生活を洋館の中でこなしたいという上流階級が結構多かったのだろうと考えられます。その典型が古河邸（図23-図26）です。コンドルは洋式庭園も設計し、それに続く奥の日本庭園は京都の庭師として知られる小川治兵衛（植治）が設計しています。東屋がありました。今は残っていません。洋館とそれに付属する部分も洋風です。当主の古河虎之助邸の生活はこの洋館だけで完結しています。一階に和室がないのも大正時代の上流階級の邸宅の特徴です。しかし二階はほとんどが和室になります。

薔薇の季節が大変有名です。一階の大食堂では今はお茶が飲めるようになっています。二階の仏間にはコンドルの好んだ火灯窓が用いられています。コンドルはすでに来日直後の論文¹⁹の中に、日本に大変面白い火灯窓という意匠があると書いています。実はこの煉瓦造、壁の内側から内側までの内法で寸法を決めている。日本の場合は木造ですから、壁芯、柱芯で寸法を決めます。できあがったものの寸法を検討すると、どこが整数値になっているかを見ることで寸法の基準を定めた位置がわかります。古河邸の場合は、一、二階ともに内法寸法で部屋の大きさを決めていきます。壁の内側に半柱をつけると、壁の内側が柱の芯になります。その上で柱から柱までの

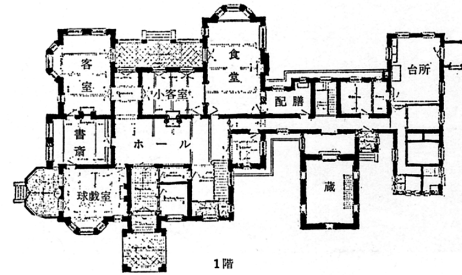
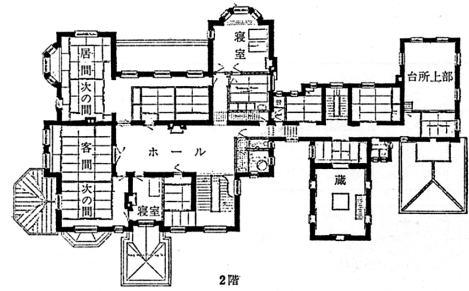


図24 古河邸平面図（大正6年）
（『建築雑誌』402号より）



図25 古河邸1階大食堂
（大正6年）

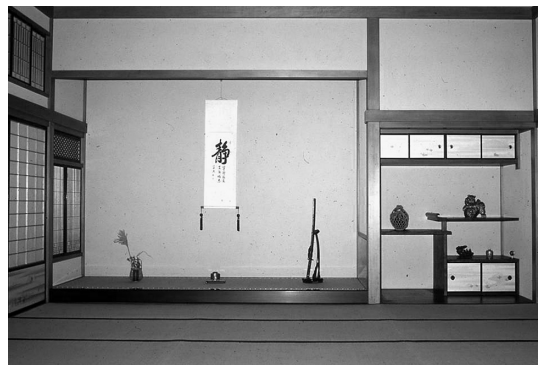


図26 古河邸2階居間（大正6年）

芯々寸法を6尺にする。いわゆる関東間です。壁の内側から内側までの寸法は、実は最初の計画はフィートですが、1フィート≒1尺という読み換えで、整数値で決め、中の和室も柱の芯から芯は6尺できちんと設計されています。これは和洋の両方の基準をそのまま押し込めた、ある意味ではなかなかうまいやり方でして、コンドルがもう少し長生きしていれば、こうした作品が幾つかできていたはずでした。

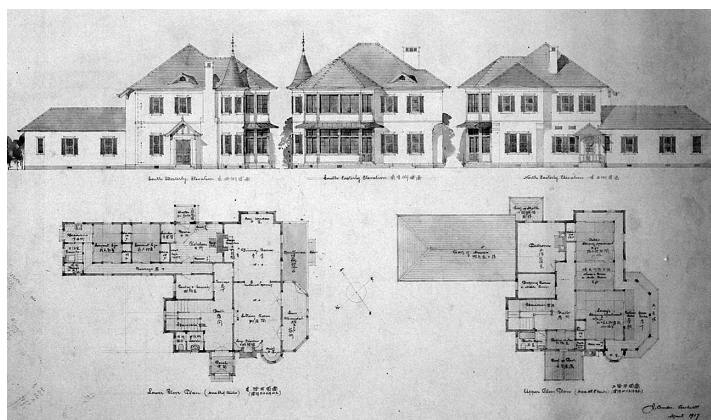


図 27 北下浦別邸設計図（大正 6 年）（京都大学蔵）

コンドルの晩年の計画案で、北下浦の別邸と書かれた一枚だけの図面（図 27）が残されています。古河邸と同じように二階の主要室はほとんど和室、それに廊下が付いています。三浦半島で、北下浦と思われる場所があるのですが、どうやら古河家の別邸であったのではないかと考えております。残念ながら実現しなかったものです。

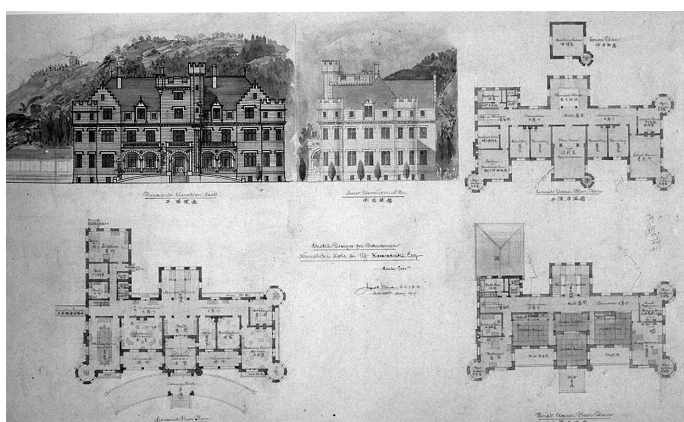


図 28 川崎邸設計図（大正 6 年）（京都大学蔵）

図 28 はコンドルが亡くなったために建設が中止された神戸布引の川崎邸ですが、やはり二階の中心部分が和室になっています。

コンドル最晩年の鉄筋コンクリート造

最後に実現したのが成瀬邸（大正 8 年）（図 29、図 30）で、亡くなる一年前でした。計画案としては岩崎邸の改築案（大正 4 年）が先にありましたが、コンドルが実現した唯一の鉄筋コンクリート造です。こちらもやはり、洋館の二階に和室が取り込んであります。ここはその後、堤清二さんのお宅に

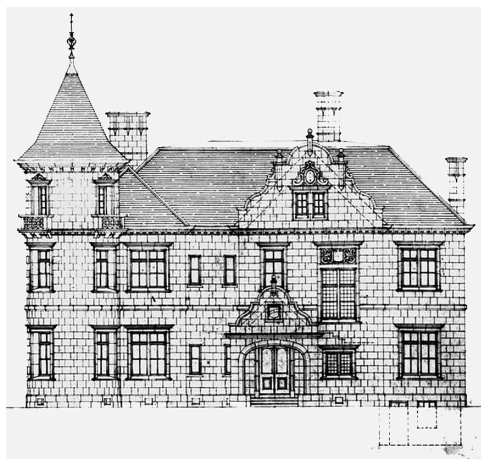


図 29 成瀬邸（大正 8 年）（京都大学蔵）

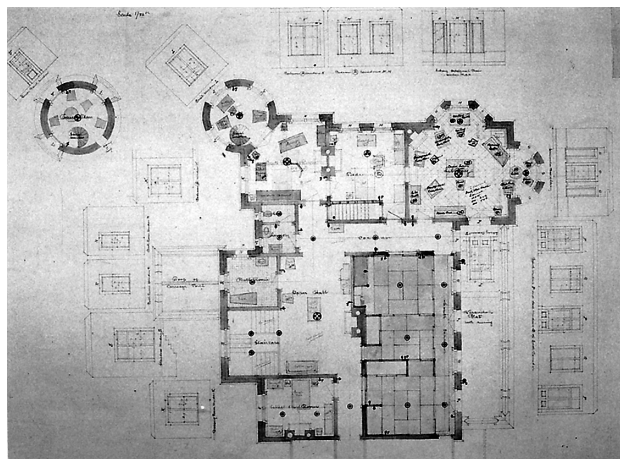


図 30 成瀬邸 2 階平面図（大正 8 年）（京都大学蔵）

なっていて、十数年前までコンドルの設計した門扉が残っていたようです。気づいて伺ったときには壊された一年後でした。建設した清水組に（現、清水建設）一部記録が残っており、鉄筋コンクリート構造を確認することができます。

まとめ

コンドルの作品の外観様式は、彼がヴィクトリアン・ゴシックの時代にイギリスで育ったこともあり、一番得意とするのはゴシック様式、そしてルネッサンス様式です。また、作風としては一応ルネッサンス様式ではあるけれど、左右対称をやめてゴシック風の雰囲気を出すなど、様々な様式を混ぜ合わせているものを準ルネッサンス様式と仮に名づけています。三菱一号館などはルネッサンス様式の系統なのですが、垂直線が強調されていてゴシック風に見えます。あるいは、古典的な装飾をやめて、少し簡略化した平坦な壁面をつくったものもあります。そういうものも全部含めて、準ルネッサンスと呼んでいるわけですが、この様式が最も多くみられます。

中期から出てくるハーフティンバーを中心としたピクチャレスク（絵画趣味）は、本邸建築よりも別邸建築に多くみられます。初期の邸宅で言いますと、北白川宮邸はゴシック風邸宅と言えますが、他の本格的な邸宅建築はルネッサンス様式が用いられています。初期にはピクチャレスクは一例もありません。中期になると、ルネッサンス様式を簡略化した軽快な外観のものが多くなり、時期的には後半が中心になりますがピクチャレスクのもので出てきます。ただピクチャレスクは、どちらかというゴシック・リバイバルと混ざった形で現れていますので、そういう意味では外観様式にはコンドルの趣向が加味されているとみてよいのではないのでしょうか。

外観の仕上げに関しては、煉瓦造で赤煉瓦を表に出したものが7棟、外壁に石を張った重厚な建物が10棟、外壁を塗り壁にしてより軽快にしたものが12棟で、ハーフティンバーが8棟。つまり様々で、コンドルには、これはこうでなければならないということはなく、例えば岩崎家本家の本邸（茅町邸）でも、石造ではなく木造で設計してしまうというところがあったようです。板張りも5棟あります。主構造は煉瓦造が半数近くです。木造が三分の一で、あとは一階煉瓦・二階木造、この場合は二階がハーフティンバーになります。鉄筋コンクリート（RC）造が計画案1棟、実施案は成瀬邸が1棟。これは晩年です。また、コンドルの邸宅で目立っているのはベランダでして、イギリスの邸宅にすべてベランダが付いているかといえばそんなことはありません。コンドルの場合は、平面がわかっているものではほとんどにベランダが付いていて、それも大半が南側を意識しています。これはやはり日本の風土ということを考慮したのだらうと思われれます。

用途で見ますと、基本的には二階建のものは一階が大食堂や客室、球技場といったパブリック、二階が寝室等のプライベート、ただしこの中には客のプライベートという意味も入っておりますので、二階の寝室は客を泊めるための寝室、ということも含まれます。これは和館があるかないかをも含めてみなければなりません。

一階と二階の機能の違いは日本人の上流階級の間を受け入れられ、自分たちの生活が徐々に洋館の中に入り込んで、二階のプライベートな部分で生活をするようになります。ただ「和室でない駄目」という人もいたようです。この辺りに生活文化の差が出ているのでしょうか。和室に関しては、松方邸（仙台坂別邸、明治38年）の和室、用途はわかっていますが、これができた頃から、洋館の中に和室が取り込まれる例が増えてきています。当初の和室は女中室などに限られていたのが、徐々に主

要な部屋を和室にしていく変化がみられます。後期の古河邸（大正6年）が二階の家族の部屋、客間でもある居間、仏間までほとんどが和室になっていますから、この変化はお分かりになると思います。

コンドル自身の考え方

近年、施主の岩崎家とコンドルとの往復書簡が明らかにされてきましたが、コンドルは生前、自分の作品を語ることはほとんどありませんでした。大正4年、亡くなる5年前に、ちょうど古河邸や島津邸の仕事をしていた頃だと思いますが、雑誌のインタビューを受けて、日本の建築界について語った文章²⁰があり、非常にコンドルらしいことを言っています。

将来の日本の建築は何う変じていくか、（略）私は官公署、銀行会社の如き所謂公共建築物は、怎うしても西洋建築であらうと信じます。スタイルは必ずしも西洋を守るには及ばない。是れは自然日本に向く様なスタイルにして宜しいが、内部は西洋にする方が執務上極く便利であります。

（日本の邸宅のあり方に関して）

例へば一方は西洋建築、一方は日本建築が、継がつて居るのもあれば、外観は西洋建築であるが、中へ入れば日本の室もあつて、畳が敷いてあります。又表面は日本建築であつて、中には西洋室の二間三間を持つて居る家も多いのであります。併しさうして居る中に一番最後には良い考のものが出来て来て、夫れに固まつて仕舞ふだらうと思ひます。

例えば一般建築ですが、将来の日本の建築はどう変じていくか、コンドルとしては、官公署、銀行会社、といった公共建築物はどうしても西洋建築でしょう。内部は西洋、椅子式の、ということです。執務のためにはやっぱり西洋建築の方がいいし、実は構造的なこと、つまり耐震性や防災、防火の意味でも、公共建築は西洋建築だろう、と言っています。面白いのは、ただしスタイルは必ずしも西洋を守らなくてもいい、自然に日本に向くようなスタイルになれば良いのではないかという考えです。そういえば、コンドルは工部大学の教育においても、学生達にこういうスタイルでやりなさい、とはほとんど言っていないようです。スタイルは自分で見つけなさい。西洋にはいろんなスタイルがあるから、自分で欧米へ行って、自分で見つけなさい。そういう教育をしていたようですし、実際に作品においても、自分でこういうスタイルをとるのではなく、立地条件、建物の目的、施主の要望に合わせていろんな様式を用いています。

同じようなことを住宅に関しても言っており、これをコンドルの邸宅作品を思い浮かべながら考えると面白いのですが、西洋建築と日本建築の二つが繋がっている型は、明治の和洋館並列住宅ですね。和館と洋館が廊下で繋がっている。両方の生活様式を取り入れて、どちらかという西洋建築が迎賓館となる事例がありました。それから外観は西洋建築であるが、中へ入れば日本の部屋もあるというのは、コンドルがこの頃から実施し始めた古河邸や成瀬邸にあたります。それから逆に日本建築であっても中に西洋の部屋が二間三間あるという建築。これも、近代の和風住宅の中では、玄関脇の一、二部屋だけ応接室や書斎が洋間であったりする例が明治の末頃から出てきます。そうした三つのタイプをちゃんとわかっていて、実際にはそのうち二つを実践しているわけですが、やがて良いものが固まるのではないかと言っています。こういう態度がコンドルのスタイル、スタンスであったようです。晩年ということもありますが、自分が日本の邸宅のスタイルをつくってやろう、というようなことではなく、日本の中でいろんなものをつくっていくうちに、日本人の好みや必要に応じてスタイルは固まっていくのではないかと述べています。大正時代には中流階級により中流住宅が建てられていきますが、それは和風の建物の玄関脇に洋間を一部屋か二部屋つけたものでした。洋間で西洋的なスタイ

ルで客を迎えることが中流住宅のステータスだったのです。洋間以外では伝統的な和室での生活、というのが戦前までに定着していたようです。上流階級では、洋館だけの生活という皇族を範とした生活様式が、島津家とか、昭和に入るとコンドルの作品ではありませんが駒場にある前田侯爵邸なども完全にそうで、娘さん達を含め、洋館だけで生活を完結するスタイルが出てきます。一階は客間や大食堂、二階は娘さんの部屋やご主人や奥さんの寝室といった使い方でした。前田侯爵邸は和館もありそちらが迎賓館になっていました。そういうスタイルも昭和になって出てきます。

コンドルの住宅をみて、日本の中で上流階級の邸宅の中にどのように洋館が普及し洋風生活が入り込んできて変化していったかというのはご理解いただけたかと思います。コンドルに言わせると、日本の住宅は日本人が考えなさい、ということだったのかもしれない。設計の態度からしても、どうやらコンドルという人物はそういう建築家だったのではないかというふうに考えております。

註

- 1 その成果をまとめたものが、河東義之『ジョサイア・コンドル建築図面集Ⅰ～Ⅲ』（中央公論美術出版、昭和55年8月、同56年5月、同56年11月）である。
- 2 主として原徳三氏（財団法人静嘉堂参与）によって発掘されたもので、東京大学鈴木博之研究室『ジョサイア・コンドル書簡史料の研究』（科学研究費補助金研究成果報告書、平成17年）にまとめられている。
- 3 “THE FLOWERS OF JAPAN AND THE ART OF FLORAL ARRANGEMENT” (KELLY AND WALSH, 東京: 博文社, 1891/明治24年), “LANDSCAPE GARDENING IN JAPAN” (KELLY AND WALSH, 東京: 博文社, 1893/明治26年), “PAINTINGS AND STUDIES BY KAWANABE KYOSAI” (KELLY AND WALSH, 東京: 丸善, 1911/明治44年)
- 4 河東義之「近代の住宅をつくった建築家たち (1) ジョサイア・コンドル」(『新住宅』新住宅社, 昭和63年9月号)
- 5 T・J・ウォートルス (英), A・C・デ・ボアンヴィル (仏), J・ダイアック (英), G・V・カペレット (伊) など。
- 6 河東義之「コンドルがもたらした西洋建築」(『鹿鳴館の夢 建築家コンドルと絵師暁英』INAX BOOKLET 10巻2号, 平成3年2月)
- 7 河東義之「コンドルが目指した建築技術の導入と確立」(『一丁倫敦と丸の内スタイル』三菱地所株式会社, 平成21年9月)
- 8 『コンドル博士遺作集』コンドル博士記念表彰会, 昭和6年
- 9 コンドルは明治17年に太政官雇となり、2年後の明治19年、官庁集中計画のために設置された内閣直属の臨時建築局に移った。その間、初期の中央諸官庁配置計画や議院建築(国会議事堂)の基本設計を行っている。
- 10 外務卿官邸は明治8年に建設が認められ、同10年に竣工した。しかしその直前に外務省庁舎が焼失したことから、庁舎の再建に併せて同一敷地内に再び外務卿官邸の建設が計画され、明治14年に竣工している。それにとまって、最初の外務卿官邸は明治9年から計画されていた太政大臣官邸に転用された。
- 11 明治18年12月に太政官制から内閣制に移行したことによって、各省の長は「卿」から「大臣」と呼ばれるようになった。
- 12 1階東側外廊部(サンルーム)や西側通用口、台所など。同一様式で描かれた設計図の一部には明治43年1月の日付が記されている。
- 13 前掲『ジョサイア・コンドル書簡史料の研究』
- 14 川上帚木「コンドル博士の婦人」(『建築文化』昭和22年)
- 15 コンドルの作品でハーフティンバー形式のものとしては、赤星家大磯別邸(明治40年)のほか、コンドル自邸(明治37年)、益田孝邸(明治39年)、末延道成邸(明治40年)、近藤廉平邸(明治42年)、赤星家赤坂邸(明治45年)、今村繁三邸(大正2年)などが知られる。
- 16 前掲『コンドル博士遺作集』
- 17 『黒田清輝日記第4巻』(中央公論美術出版, 昭和43年)
- 18 鉄筋コンクリート造の近代建築でありながら伝統的な瓦葺きの屋根を架けた建築で、ナショナルリズムの高まりを背景として昭和初期に流行した。代表的な遺構として九段会館(旧軍人会館, 昭和9年)や東京国立博物館本館(旧東京帝室博物館, 昭和12年, 重要文化財)などが知られる。
- 19 J. Conder “Further Notes on Japanese Architecture” (『RIBA Journal』1886. 3)
- 20 コンドル「日本の建築界に於ける感想」(『建築世界』大正4年3月号)

(かわひがし よしゆき)